

海外移住 資料館だより

日本人の海外移住は150年以上の歴史があります。JICA横浜 海外移住資料館では、海外へ移住し、それぞれの国や地域で新しい文明作りに参加してきた日本人移民の歴史と、日系コミュニティについて広く理解を深めてもらうことを目的に、さまざまな資料を展示しています。

■発行元：JICA横浜 海外移住資料館
神奈川県横浜市中区新港2-3-1 JICA横浜2階
Tel: 045-663-3257(代)
URL: <https://www.jica.go.jp/domestic/jomm/index.html>
■編集発行人：JICA横浜 海外移住資料館 館長 大野 裕枝

巡回パネル展示

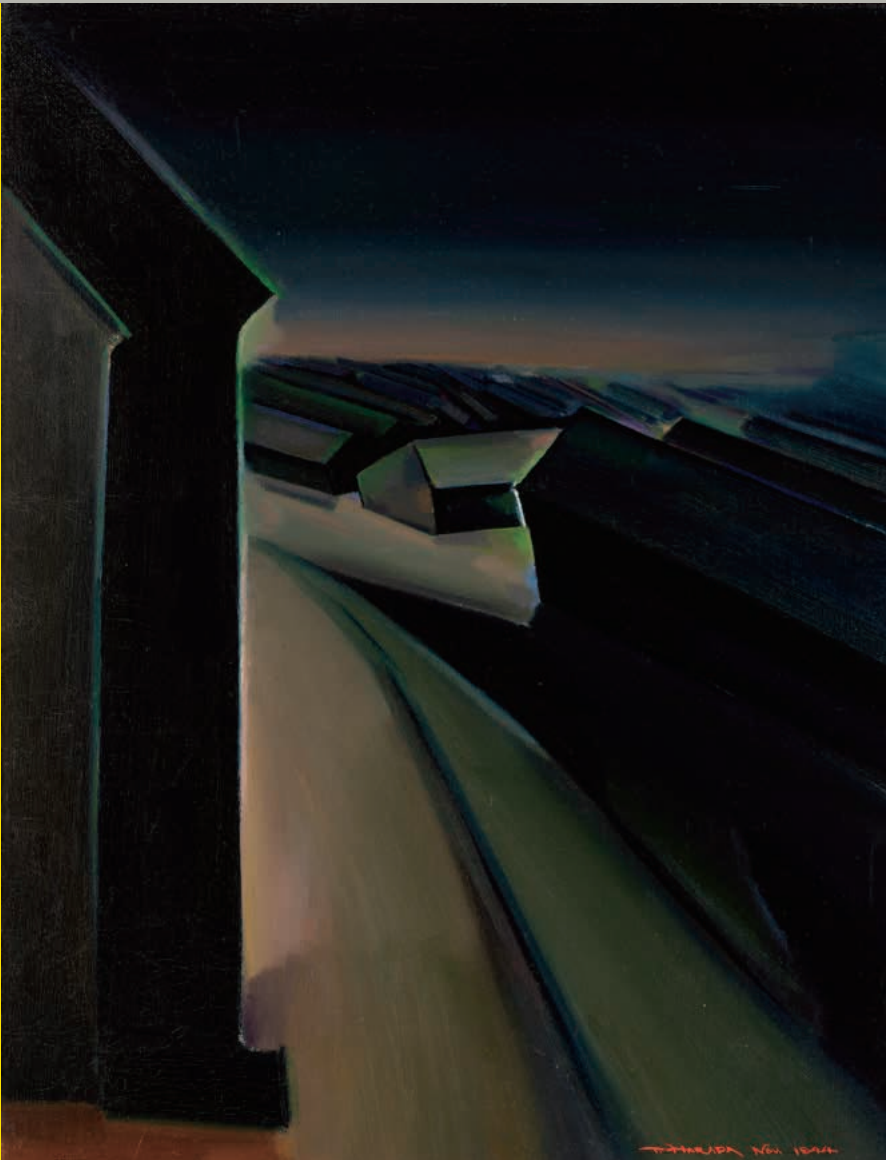
追憶

絵画からたどる
日系アメリカ人の歴史と美術
全米日系人博物館の
コレクションより

2026年
2月13日(金)～5月10日(日)

タネユキ・ダン・ハラダ
(1923–2020) *Taneyuki Dan Harada*

1923年にロサンゼルスで生まれたハラダは、7歳から14歳までを日本で過ごし帰国。真珠湾攻撃の後、家族とともにカリフォルニア州オークランドの自宅から強制的に立ち退かされ、タンフォラン仮収容所でミネ・オークボやフランク・タイラ等、タンフォラン美術学校を創設したアーティストたちに美術を学んだ。ユタ州のトパーズ強制収容所に短期間収容された後、カリフォルニア州北部のツールレイク隔離センターに送られ、センター内のアイロン室で初めての個展を開いた。戦後、コンピューター・プログラミングの仕事に従事していた間は美術のキャリアを中断せざるを得なかったが、引退後に再び絵を描くようになった。



「寄せ集まったバラック」

これはユタ州中部にあったトパーズ強制収容所を描いたものである。ハラダの構図、色彩、フォルムは、その荒涼とした風景を、まるでどこかかわらないような異質な場所に変貌させている。

場所不明、1944年頃
油彩、画布、66×50.8cm
全米日系人博物館蔵、
タネユキ・ダン・ハラダ寄贈

Day of Remembrance

巡回
パネル
展示

追憶

絵画からたどる
日系アメリカ人の歴史と美術
全米日系人博物館のコレクションより

アメリカの日系コミュニティでは、1942年2月19日にフランクリン・ローズベルト大統領（当時）が大統領令9066号に署名した日を「追憶の日(Day of Remembrance)」とし、第二次世界大戦中の日本人移民とその子孫の強制収容を追憶する日となっています。

当館では、ロサンゼルスにある全米日系人博物館（Japanese American National Museum：JANM）と協力し、2月19日の「追憶の日」にあわせて、2月13日より5月10日まで、巡回パネル展示「追憶 絵画からたどる日系アメリカ人の歴史と美術 全米日系人博物館のコレクションより」を開催。JANMの所蔵コレクションから、多彩な日系アメリカ人アーティストの芸術作品を紹介しています。

第二次世界大戦中、アメリカ西海岸に住んでいた日本人移民とその子孫は、アメリカ各地の強制収容所へと送られました。この日系人の経験を、保存し伝えることを通して、より多様で公正な社会を実現していくために設立されたのが、全米日系人博物館です。

今回パネルで展示する18作品は、戦時中の強制収容の歴史を記録すると同時に、その時、日系アメリカ人アーティストたちが何を見、何を考えたのかを浮かび上がらせています。

※特記がない限り、写真や絵画などのイメージは全て全米日系人博物館提供

展示では、10名のアーティスト(全18作品)を紹介しています。本誌では、その中から6名のアーティストをピックアップします。

ヘンリー・ユズル・スギモト (杉本謙) (1900–1990)

Henry Yuzuru Sugimoto



撮影：トーヨーミヤタケスタジオ

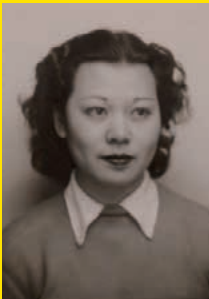
和歌山で生まれたスギモトは、1919年にアメリカに移住し、先に移住していた両親と合流した。カリフォルニアで美術を学んだ後、フランスで4年間腕を磨き、画家としての活動に心血を注いだ。結婚し、語学学校の教師として働きながらアメリカで広く作品を展示した。しかし名の知れた会場で作品が展示されるようになった矢先、真珠湾攻撃によって彼の生活は一変した。カリフォルニア州フレズノ収容所、アーカンソー州のジェローム強制収容所とローワー強制収容所に収容されたスギモトは、並外れた詳細なスケッチや絵画で収容所での日系アメリカ人の日常生活を記録するだけでなく、人々が経験した悲しみ、混乱、怒り、そして喜びさえも捉えている。

「ジェローム収容所にて(千人針)」
(ジェローム強制収容所、アーカンソー州、1943年)

日系アメリカ人男性が米軍への志願を求められると、一世の母親たちはしばしば武運長久を祈って千人針を作った。スギモトの弟の一人は、日系アメリカ人の隔離部隊「第442連隊戦闘団」に所属していたので、戦場での息子の安全を願う母親の気持ちは、スギモトにとっても身近なものであった。スギモトは敬虔なキリスト教徒でもあり、この絵のイメージの組み合わせによって、日系アメリカ人の母親の悲しみと不安、そして日系アメリカ人の若者のコミュニティや国への献身を描いている。



ミネ・オークボ (1912–2001) Miné Okubo



二世であるオークボは、カリフォルニア州で生まれ、カリフォルニア大学パーレー校を卒業した。奨学金を得てヨーロッパ留学中に、ドイツのポーランド侵攻により第二次世界大戦が勃発。カリフォルニアに戻ると太平洋戦争が始まった。カリフォルニア州のタンフォラン収容所とユタ州のトバース強制収容所に弟たちと収容されたオークボは、収容所で美術学校の活動に関わり、収容所の出版物の挿絵も手がけた。彼女のグラフィック書籍「市民13660号」は、戦時中の強制収容について初めて経験者の視点から描いた一冊だ。戦後はニューヨークに移り、2001年に亡くなるまでアートに没頭し続けた。

サダユキ・ウノ (宇野貞之) (1901–1989) Sadayuki Uno



左端がサダユキ・ウノ。右奥に立っているのはヘンリー・スギモト、ローワー収容所での美術展にて(1945年)

広島に生まれたウノは、1917年に父親の後を追ってカリフォルニアに移住。美術工芸学校に短期間通った後、シカゴとニューヨークで写真と映画撮影を学び、ハリウッドを目指した。真珠湾攻撃が起きたときは、妻と子供たちとペイエリアに暮らしていた。カリフォルニア州のバインデル収容所に入れられ、その後アーカンソー州ジェローム強制収容所とローワー強制収容所に送られた。収容されていた時期は、彼の生涯の中で最も多く作品を作り上げた時期であった。

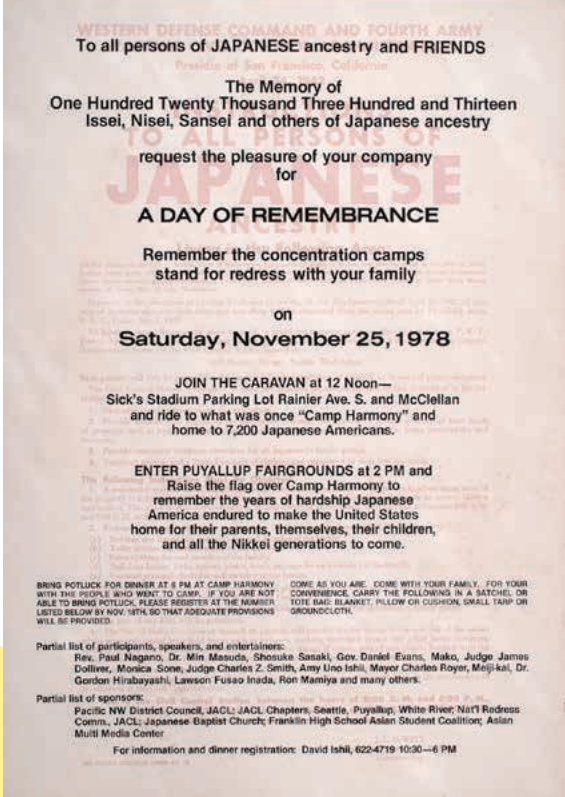
「無題(カードゲームをする男たち)」
(ジェローム強制収容所、アーカンソー州、1944年)

全ての財産を失い、何十年もかけて築き上げた生活を奪われた日系アメリカ人にとって、退屈と絶望は最大の敵だった。長い間、独身労働者の娯楽であったギャンブルやカードゲームは、収容所でも人気のある退屈しのぎであった。



「荷物を持って立つ
ミネと弟のトク」
(トバース強制収容所、ユタ州、1943年頃)

このイラストは、オークボによる画期的な著作「市民13660号」に掲載されたもので、強制立ち退きの際に持つことのできた限られた荷物とともに、オークボ姉弟の姿を描いている。



1978年、シアトルで開催された第1回「追憶の日」のポスター

「追憶の日」の背景

第二次世界大戦中、アメリカ合衆国の日系人は、日本人を祖先に持つという理由だけで、西海岸から立ち退かされ強制収容所へと送られました。そのきっかけとなったのが、1942年2月19日にフランクリン・D・ローズベルト大統領が署名をした「大統領令9066号」でした。大統領令9066号は、軍に特定の地域から民間人を排除する権限を与えたもので、これを受けて西海岸の軍部は、西海岸からの日系人の立ち退き、収容を命じたのです。収容された約12万5000人のうち3分の2は、アメリカ生まれのアメリカ人でした。

戦時転住局が運営していた10カ所の強制収容所は、1944年から1946年にかけて閉鎖されましたが、立ち退きの際に家やビジネスを手放さざるをえなかった多くの人々は帰る家もなく、戦前から続く差別的な法律や習慣、偏見も、依然として残りました。何より、自らの国による裏切りのトラウマは、その後、世代を超えて残ることとなったのです。

「語られることのなかった歴史

強制収容を経験した一世、二世たちが当時の経験を語ることは少なく、その後の世代である

三世が、自分たちの家族が自らの国によって強制収容されたことを知るのは、1960年代後半以降、彼らが大学に進学してからでした。

1978年に始まった「追憶の日」は、それまで語られることのなかった経験を思い起こし、日系コミュニティがリドレス運動を推し進めていくためのものでした。「リドレス(Redress)」とは、過ちを正すという意味であり、第二次世界大戦中の強制収容は憲法で保障された自由や公民権の侵害であるとして、その過ちを正し、米国政府からの謝罪と賠償を求める運動でした。

全米各地に広がった「追憶の日」

1978年11月25日、シアトルの日系コミュニティは、初めてとなる「追憶の日」に、1942年に行われた「ビュアラップ集合センター」(ミニッド収容所移送前に集められた仮収容所)への立ち退きを再現しました。この日、ビュアラップへ向かうシアトルの集合地点には2,200人以上が集まり、また1,000人以上がそれぞれの足で直接ビュアラップへと向かい、日系コミュニティ内外の人々とメディアの関心を集めました。

第2回の「追憶の日」は、大統領令9066号が発令された2月19日にあわせる形で、ポートランドで1979年に開催されました。この後、「追憶の



1992年の「追憶の日」でスピーチをするノーマン・ミネタ連邦議会議員(当時)

日」は、ロサンゼルスなどその他の都市でも開催されるようになり、現在に至るまで全米各地のコミュニティで毎年実施されています。また、1986年には、カリフォルニア州のジョージ・デュークメジアン州知事が、2月19日をカリフォルニア州の「追憶の日」に制定しています。

「勝ち取った謝罪と賠償

「追憶の日」が目指したのは、それまで強制収容の経験について語ることの難しさを経験してきた日系コミュニティが、その歴史を口にし、互いに耳を傾け、自分自身のルーツを責めたり恥じたりするのではなく、収容は政府の過ちであったことを認識し、自分たちの人権を侵害した政府に対して怒り、過ちを正し、リドレス運動への支持を広げて

いくことにありました。

1969年から元収容所を訪ねる「巡礼」が開催されていましたが、遠隔地にある収容所跡より、アクセスしやすい都市部で開催される「追憶の日」は、より多くの人々やメディアの関心を集めました。さらに、日系政治家らがそのプログラムで発言をすることもありました。彼らは「リドレス法案」の提出に關与して世論の支持を期待していたのです。そして1988年8月10日、リドレス運動の成果が実を結び、「市民の自由法」によってアメリカ連邦政府は強制収容の過ちを認め、謝罪し、この日に生きていた元収容者一人あたり2万ドルの賠償金の支払いを定めたのです。



ロサンゼルスで開催された「追憶の日」のイベントには、元収容者やその子孫、関係者たちが、当時収容された各収容所の名前が記されたのぼりを持って集まった(2024年2月12日、全米日系人博物館にて。撮影：リチャード・ワタナベ)

歴史を繰り返さないために

リドレスの成立後も、「追憶の日」はその役割を変えながら、現在も全米各地で続いています。日系アメリカ人の強制収容に対するリドレスは成立しても、その歴史が忘れられ、失われてしまえば、歴史はいつも簡単に過去を繰り返そうとするからです。

「追憶の日」は、日系アメリカ人の強制収容の歴史を思い起こすだけでなく、その過ちを正すためにリドレス運動に立ち上がった人々と、一人一人が参加することの意義を思い起こし、その歴史の教訓を現在、そして未来に生かしていくための行動の日となっているのです。

トキオ・ウエヤマ (上山鳥城男) (1889–1954)

Tokio Ueyama

1889年に和歌山で生まれたウエヤマは、19歳でサンフランシスコに渡り、美術を学んだ。サンフランシスコ、ロサンゼルス、フィラデルフィアの学校に通った後、1920年に奨学金を得てヨーロッパ各地に渡り、勉強を続けた。ロサンゼルスに戻った後は、カリフォルニアとメキシコで広く展覧会を開催。彼の名声が高まっていたまさにその時、第二次世界大戦が始まり、ウエヤマはカリフォルニア州のサンタアニター時収容所とコロラド州のアマチ強制収容所に収容された。アマチでは美術学校の設立に貢献した。戦後はロサンゼルスに戻り、リトル東京でギフトショップ「文化堂」を開業した。



「立ち退き者」
(サンタアニター時収容所、カリフォルニア州、1942年)

愛情を込めて描かれたこの家庭の風景は、どこにでもありそうなもの。しかし、そこはアメリカの収容所であった。妻が繻子物をする一瞬を捉えようとしたウエヤマの決意は、彼のアーティストとしての鋭い眼差しと、最悪の状況においても美しいものを作り出そうとする執念を反映していると言えるだろう。

「朝」(トバース強制収容所、ユタ州、1942年)

アメリカ政府の戦時転住局が運営していた10カ所の強制収容所は、いずれもアメリカ内陸部の隔離された厳しい気候の地域に建てられた。しかし、周囲の風景はしばしばアーティストたちにドラマチックな画題を提供することになった。ユタ州中央部から見る太陽を描いたこの絵は、困難な状況の中でも美を見出すことのできる人間の精神の度量を示すものでもある。



「洗濯室」(トバース強制収容所、ユタ州、1942年)

幼い子供を持つアーティストであったヒビは独特の視点を持っていたが、それは彼女の収容所の描写にも見て取れる。トバースの自然や建造物の見事で荘厳な風景に加え、彼女は、共同洗濯室で家族の衣服を洗濯する女性たちを描いたこの絵のような、より親密な家庭の風景も描き残している。



立っている女性が、立ち退きの時のヒサコ・ヒビ(撮影：ドロシア・ラング、1942年5月8日、カリフォルニア州ハイワード、提供：アメリカ国立公文書記録管理局)



Artists of "Day of Remembrance"

Japanese American National Museum

全米日系人博物館 アン・バロウズ館長兼CEOからのメッセージ



全米日系人博物館
館長兼CEO
アン・バロウズ

このたび、当館の所蔵コレクションから、日系アメリカ人の歴史を伝える作品をご紹介できることをうれしく思います。これまで駐日米国大使公邸や福岡、名古屋を巡回してきたこの展示は、今回、新たな展示物を加えて海外移住資料館で皆さんにご覧いただけることになりました。

第二次世界大戦中、アメリカ西海岸に住んでいた日系アメリカ人は、不当にも強制収容所へと送られました。その後20年以上、その歴史は公の記憶から失われかけていましたが、1960年代後半から日系アメリカ人コミュニティが声を上げ、政府に謝罪と賠償を求める運動を起こし、1988年に「市民の自由法」によってそれを実現しました。全米日系人博物館は、この歴史を収集、保存・発信し、多様性への理解を深め同じ過ちが繰り返されない事を願って1985年に設立されました。

今、全米日系人博物館は16万点以上の世界最大となる日系アメリカ人に関する収蔵物を保管しています。全てコミュニティから寄贈されたものであり、こうした物が伝える歴史は、記憶され、想起され、次世代に受け継がれていくことで、生きたものとなります。

この展示で紹介されている作品のうち、いくつかの作品は収容所の中で、また他のいくつかの作品は収容所を出てから描かれたものです。これらの作品を通して私たちが思い起こすのは、二度と起こしてはならない過ちだけではなく、収容所の中でも創造力やユーモアを失わず、美や喜びを描き、抵抗し、立ち上がり、たくましく生き、政府の謝罪を勝ち取り、この歴史を伝えてきた人々の姿です。真実をありのままに記憶し、思い起こすこと。それは尊厳の静かなる表明であり、歴史を抹消しようとする動きに対する、力強い抵抗です。それは私たち市民としての責務であり、民主主義そのものを守る行為なのです。

2026年末 全米日系人博物館 (JANM) が待望のリニューアルオープン!

改装工事のために2025年1月より休館中のJANMですが、リニューアルの内容について、JANMスタッフの三木昌子さんにお話を伺いました。

1992年の開館以来、日系アメリカ人の歴史と文化を伝える施設として重要な役割を果たしてきたJANMですが、大規模改修を経て2026年末にリニューアルオープンする予定だそうですね?

はい、そうなんです。リニューアルの内容は、単なる改装にとどまりません。著名な日系人建築家、ギョウ・オバタ氏が設計した建物の象徴的な外観はそのままに、内部を大幅に刷新し、新しい展示室や資料室を設けます。これによって、来館者のみなさまにとってさらに親しみやすく、日系アメリカ人の物語に深く触れられる空間へと生まれ変わります。

リニューアルの目玉は、どんなところでしょうか?

一番の目玉は、1999年から親しまれてきたこれまでの常設展に代わる新常設展「私たちが今と呼ぶ未来で一人種差別の現実、民主主義の夢」です。150年以上にわたる日系アメリカ人の歴史を、単独の物語としてではなく、広くアメリカ史や世界史の文脈の中に位置付け直すことによって、日系人の歴史をアメリカの「周縁」ではなく、「アメリカの本質的な物語」として提示するという、新たな解釈と視点に満ちた展示を展開します。

さらに、新しい研究成果や解釈を取り入れ、これまでの展示が扱っ



全米日系人博物館 (JANM) の外観

ていた1990年代までの歴史に加えて、それ以後の日系コミュニティの変遷や、民主主義の擁護といった現代的な課題にも焦点を当てます。

ハートマウンテン収容所のバラックや、マンザナー収容所のジオラマなど、多くの来館者に親しまれてきた象徴的な展示物も引き続き展示します。

また、主要な展示パネルには、英語に加えて日本語とスペイン語を併記します。パネルに日本語訳がない展示についても、スマートフォンなどを利用して日本語訳や音声ガイドが利用可能となります。グループ向けの日本語ツアー（予約制）も実施する予定です。

より包括的で多角的な視点を持って生まれ変わる新しい全米日系人博物館のオープンは、日系コミュニティの歴史だけでなく、すべてのアメリカ史に関心を持つ人々にとって大きな出来事となりますね! 再開を楽しみに待ちたいと思います!!

全米日系人博物館

Japanese American National Museum
100 N. Central Ave., Los Angeles, CA 90012
www.janm.org



新しい常設展のイメージ図
収容所のバラックも引き続き展示される

TOPICS

ジョージ・タケイさん絵本出版記念 セレモニー&サイン会を開催!



サイン会の様子

この度、日系アメリカ人三世の俳優、ジョージ・タケイさんの絵本『ぼくらの自由がうばわれる時 第二次世界大戦の日系アメリカ人の物語 (原題: My Lost Freedom)』の日本語訳版が出版されたことを記念して、JICA横浜で11月22日(土)、出版記念セレモニーとサイン会を開催しました。タケイさんは、自らの体験をもとに描いたこの絵本を通じて、第二次世界大戦中にアメリカで強制収容された日系人の歴史を次世代の子どもたちに伝えてほしいと挨拶しました。会場には長年のファンをはじめ、当館で上映しているタケイさんの動画メッセージを視聴した来館者など70名が集まり、タケイさんの言葉に耳を傾けました。

* 当館常設展示場内「経験語り継ぐ」のコーナーでは、ジョージ・タケイさんのインタビュー映像を上映しています。ご来館の際はぜひご覧ください。

JICA海外移住「論文」および「エッセイ・評論」 受賞作品発表!

第六回 JICA海外移住「論文」および「エッセイ・評論」において、以下の方々が受賞されました。

論文部門

最優秀賞
賞金:50万円

秋深し五七五交わす加奈陀かな
— 戦前カナダにおける日系人俳句コミュニティの社会的考察 —
天野剛至さん 千葉大学外国語学部 教員

優秀賞
賞金:5万円

ハワイ日系人社会における日本文化継承
— 日米開戦前の日本語学校課外活動を通じて —
彌島真帆さん 株式会社乃村工務社

「中立国」アルゼンチンの日本人移民
— 「満洲新聞」と『亜爾然丁時報』の国際通話 —
高木佳奈さん 東京科学大学リベラルアーツ研究教育院 教員

エッセイ・評論部門

最優秀賞
賞金:20万円

平和大通りに咲く赤い花
— 被爆80年、『亜国日報』から読み解く 広島とアルゼンチンの絆 —
相川知子さん
ブエノスアイレス市立外国語大学フアン・ラモン・フェルナンデス校レングアスビバス 教師

優秀賞
賞金:5万円

あるハワイ移民の岐路
— 和助とリウの選択 —
小迫孝乃さん 「お寺と教会の親なきあと相談室」アドバイザー

**インカ帝国の首都クスコに生きたパイオニア:
西山音松の足音**
熊谷 雄さん 北海道大学大学院 / ペルー日系人協会クスコ

「エッセイ・評論」部門で優秀賞を受賞された小迫孝乃さん、熊谷 雄さんへの授賞式が、2025年12月18日(木)に海外移住資料館にて開催されました(相川さんはご都合により欠席)。当日、大野裕枝館長から優秀賞の賞状を受け取った小迫さんは「曾祖父の生涯を掘り下げていく中で、海外に行った日本人、先人の日本人の思いに心を委ね、初めて他人事ではなく歴史を体感することができました」と喜びをかみしめていました。また、同じく優秀賞の熊谷さんは「ほとんど知られていない西山音松の話を、この賞を頂くことにより、多くの方に読んでもらえるのはとても嬉しく思います」と語りました。受賞作品は、資料館HPで閲覧可能です。

現在、第七回JICA海外移住「論文」および「エッセイ・評論」の作品を募集中! みなさま奮ってご応募ください。募集要項は資料館HPにて掲載しています。



左より熊谷さん、小迫さん、大野館長



第七回
募集要項



独立行政法人国際協力機構 横浜センター

海外移住資料館

〒231-0001 神奈川県横浜市中区新港2丁目3番1号
TEL.045-663-3257 FAX.045-211-1781

<https://www.jica.go.jp/domestic/jomm/index.html>

Eメール
jicayic_jomm_info@jica.go.jp



公開講座のお知らせ

歴史をつむぐ、歴史をつなぐ

現在開催中の巡回パネル展示「追憶—絵画からたどる日系アメリカ人の歴史と美術」に連動した公開講座を開催します。

この展示のプロジェクトマネージャーである全米日系人博物館の三木昌子さんを講師としてお迎えし、展示作品のアーティストの来歴や逸話、現在改修工事中の全米日系人博物館の歴史や収蔵コレクション、裏話などをお話しいたします。

ぜひ奮ってご参加ください。

講師

三木昌子氏
(全米日系人博物館
渉外担当ディレクター)



2026年

3月14日(土)

14:00-15:30

**JICA横浜2階
海外移住資料館内
企画展示室**

入場無料 予約不要

オンラインセミナー

ハワイ移民の岐路 和助の生涯 —TWO HIROTA FAMILY'S HISTORY—

2026年2月28日(土) 14:00-15:30

事前登録制: Zoom開催 定員500名

お申し込みは
こちら

講師

小迫孝乃氏

(「お寺と教会の親なきあと相談室」アドバイザー)
(第五回、第六回JICA海外移住「エッセイ・評論」
部門優秀賞受賞者)



2022年、ハワイに移民した曾祖父・「廣田」和助の調査を母親の依頼で開始した小迫さん。主にインターネットによる調査により、和助の人生が徐々に明らかになると同時に日系人の歴史を学び、遂には米国の親族を発見。2023年に日米の家族の対面が実現しました。また、3年にわたる調査で、曾祖父の人生の岐路と選択についての謎や、当時の決断を推測するまでに至りました。本セミナーでは、インターネットが繋いだ奇跡の過程と、移民として生きた二人の思いを辿ります。

海外移住資料館 周辺マップ



アクセス

みなとみらい線
「みなとみらい」駅(クイーンズスクエア方面改札)から徒歩約15分
JR線・市営地下鉄
「桜木町」駅から徒歩約15分
(汽車道→ワールドポーターズ→サークルウォーク)
バス「あかいくつ」号
「ハンマーヘッド」から徒歩約2分

●開館時間 10:00~18:00(入館は17:30まで)
●休館日 月曜日(月曜日が祝祭日の場合は翌日)
●入館料 無料